

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(1)

総谷 智雄

Author TATIYARA Masaaki as the Korean Resident
in Japan First Generation (1)

KASETANI Tomoo

神戸医療福祉大学紀要 第15巻 第1号

(平成26年12月)

<原著>

「在日朝鮮人一世としての作家・立原正秋」(1)

総谷 智雄

Author TATIHARA Masaaki as the Korean Resident in Japan First Generation (1)

KASETANI Tomoo

TATIHARA Masaaki (1926-1980) is an author who did writing activity in 1960's-70's mainly. Still, his works are supported from many readers. TATIHARA said, "My parents are both of Japan and Korea Mixed", but he was born from Korean's parents in Korea under the colony control by Japan actually, and he was the Korean resident in Japan first generation which has migrated to Japan by 11 years old and has finished the life by 54 years old in Japan.

This thesis has for its object to understand his ethnic identity as the Korean resident in Japan first generation.

Key words : colony control by Japan, ethnic identity, Korean resident in Japan, first generation

日本による植民地支配、民族意識（エスニック・アイデンティティ）、在日朝鮮人、一世

1. はじめに

立原正秋（たちはら まさあき：1926－1980）は、主に1960年代～70年代に執筆活動を行った作家である。独特の美意識を持つ人物を主人公にすることが多い彼の作品は、今なお、多くの読者から支持されている。立原正秋は、自著による年譜において、自身の両親について、「父母ともに日韓混血」であると述べている¹⁾が、武田勝彦と高井有一による評伝²⁾によってそれが事実と異なることが明らかになっている。彼は、日本による植民地支配下の朝鮮において朝鮮人の両親から生まれ、11歳で日本に渡り、日本において

54歳でその生を終えた在日朝鮮人一世³⁾だった。

本稿は、立原正秋の作品などから、在日朝鮮人一世としての彼の民族意識や葛藤などを読み解いていくことを目的とする。

2. 生い立ちと作品

立原正秋は1926年1月6日、朝鮮半島南東部、現在の慶尚北道安東郡（キョンサンブクト アンドンゲン）の農村にて出生した。彼が5歳のときに父親が死去し、9歳のときに母親が再婚して再婚相手と渡日したため、母の弟宅に預けられる。その後、11歳で日本に

渡り、神奈川県横須賀で母たちと共に暮らすようになる。1939年（13歳）には横須賀市立商業学校に入学し、2年生ごろから、夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、川端康成などの日本の近代小説を愛読するようになる。これと平行して、徒然草などの日本の古典文学にも関心を抱くようになる。

1945年（19歳）、早稲田大学専門部法科に入学するが、戦時徴用により、日本鋼管鶴見工場に通う日々が続く。そして、日本の敗戦・朝鮮の「解放」を迎える。

1946年（20歳）、早稲田大学文学部の聴講生になり、同大文芸研究会の短編小説コンクールで一等を獲得する。1951年（25歳）には「立原正秋」の筆名で、短編小説「晩夏或は別れの曲」を発表し、1956年（30歳）に『近代文学』に掲載された「セールスマン・津田順一」が注目される。

1964年（38歳）、「薪金」が芥川賞候補になり、翌年「剣ヶ崎」が芥川賞候補になる。そして、1966年（40歳）に「白い罌粟」で、直木賞を受賞する。その後、1968年（42歳）5月から読売新聞夕刊に「冬の旅」の連載を開始（1969年4月完結）し、大好評を博す（1970年に連続ドラマ化される）。1973年（47歳）3月から日本経済新聞に「残りの雪」の連載を始め（1974年1月完結。後にドラマ化）、同年5月、韓国を訪問する。翌年、その体験などを『風景と慰藉』（中央公論社）で発表。1975年（49歳）に自伝的小説『冬のかたみに』（新潮社）を発行し、1977年（51歳）4月より、日本経済新聞に「春の鐘」の連載を開始（1978年2月完結。後に映画化）する。そして1980年（54歳）、食道癌により、死去。

立原正秋のこのような、1960年代から70年代にかけての華々しい文筆活動について、高井有一は次のように述べている。「順風満帆の歩みの背景には、高度経済成長によって

繁栄する社会があった。古典志向の強い彼は、戦後の社会に美的節度が失われたのを嘆き、金銭と能率万能の風潮に嫌悪を示し続けたが、一方では、高度経済成長の余恵を蒙って、金銭的にも時間的にも余裕を得た女性たちが、派手やかな作風の彼の小説の、最もよい読者となった事実は争へない」⁴⁾

この指摘は、近年における、韓国ドラマなどへの人気、いわゆる「韓流」の主たる担い手とみられる現代日本社会における女性たちと関連付けると、一層興味深い。

3. 金胤奎から立原正秋へ～6つの名前～

1926年に父・金敬文（キム キョンムン）、母・権音伝（クォン ウムジョン）の息子として生まれた立原正秋は、「胤奎（ユンギュ）」と名づけられる。すなわち彼は、「金胤奎（キム ユンギュ）」として、生まれ育った。

渡日の翌年（1938年）、横須賀市立衣笠尋常高等小学校に編入学した金胤奎は、「野村震太郎（のむら しんたろう）」と名乗る。これは、母の再婚相手である王命允（ワン ミョンユン）の通名が「野村辰三」だったためだと考えられる。そして彼は1939年、横須賀商業学校に「金胤奎（きん いんけい）」と名乗って入学する。これについて高井有一は、「商業学校は戸籍の記載通りの名を名乗らせる方針を採つてゐたのであらう」⁵⁾と、推測している。

その後、1940年、朝鮮人に日本風の名前を名乗らせるという政策、いわゆる「創氏改名」によって、金胤奎は「金井正秋（かない まさあき）」と名乗るようになる。1948年7月（22歳）に長男を授かった彼は、米本光代との婚姻を通して、彼女の戸籍に入り、「米本正秋（よねもと まさあき）」となる。その3年後（1951年）、米本正秋は「立原正秋」

の筆名で、短編小説「晩夏 或は別れの曲」を発表し、その後、立原姓を日常生活においても使用するようになる。そして1980年に戸籍上の姓を「米本」から「立原」へと改姓し、その二ヶ月後に立原正秋は死去する。

現在でも、入居差別などから逃れるための「避難手段」として、本名（民族名）を名乗らずに通名（日本名）を使用する在日朝鮮人は少なくない。6つの名前を生きた（生きざるを得なかった）立原正秋の生涯は、日本と朝鮮の歴史的関係、日本社会における朝鮮人への「まなざし」を考えるにおいて、示唆するところが大きい。

4. 「剣ヶ崎」から読み解く葛藤と社会観

「剣ヶ崎」は、1965年4月に『新潮』に掲載され、同年発行の短編集『剣ヶ崎』（新潮社）に収録された作品だ。この作品はこの年の芥川賞候補になり、同年『文藝春秋』9月号に再録された。

立原正秋が11歳（1937年）に朝鮮から日本に渡り、新生活を送ることになった神奈川県三浦半島を主たる舞台とした「剣ヶ崎」は、日朝混血（父は日朝混血、母は日本人）の兄弟（石見太郎・次郎）が主人公だ。彼らの父方祖父の名前は、李慶胤（リ ギョンユン）。前述のように、立原正秋の民族名は、「金胤奎」である。同作において、太郎は「俺は日本人を憎み朝鮮人を憎み、日本人を愛し朝鮮人を愛してきた。俺のなかでは、圧迫者と被圧迫者の血が平行して流れ、いつまでたっても終わりのない葛藤が続いている」と語っている⁶⁾。前述のように、立原正秋は太郎のような「混血」ではないが、朝鮮と日本の狭間で生きてきたという点においては、太郎と共通点がある。彼は自著による年譜で、「昭和二十年、日本と朝鮮が滅亡することを切にね

がう。八月、終戦」⁷⁾と記している。この文に込められた思いは、太郎の「俺は日本人を憎み朝鮮人を憎み」という思いと重なるのではないだろうか。

そして次郎は、「日本人にも溶けこめず、朝鮮人にも溶けこめず、絶えず宙ぶらりんの形で日々を生きて行かなければならなかったのです」⁸⁾と述べている。これは、「日本人でもなく、本国の朝鮮人とも異なる」という、在日朝鮮人の一面を活写している。在日朝鮮人一世である立原正秋であればこそその表現だと筆者は解釈する。また次郎は、「島国根性というものがあり、それが私を受けいれてくれないわけです。私は、人からきかれれば、何分の一かは朝鮮の血が入っていると答えます。そうすると、相手の態度が目に見えない速度で変わって行き、よそよそしくなっていくのです。理屈では割り切れない日本人の血、不思議な民族の血がそうさせるわけです」⁹⁾と、日本社会（日本人）の排他性・排外性を指摘している。この次郎のことばも、作者による単なる創作では決してありえないことは言うまでもない。

5. 1948年における立原正秋

1948年は、立原正秋にとって特別な意味を持つ年だ。前述のように、同年7月の長男誕生にともない、米本光代との婚姻を通して彼女の戸籍に入ることにより、彼の戸籍上の名前は「米本正秋」となる。そして8月には大韓民国が樹立し、9月には朝鮮民主主義人民共和国が樹立する。

長男誕生に際して彼が詠んだ詩「言祝ぎ（ことほぎ）の日」は、次のようなものである¹⁰⁾。

言祝ぎの日

巨大な複眼のような空から
途方もない面積をしめ
ひかりが拡散してふってきた日

ああ 言祝ぎの日だ
妻よ これは男の子だ
途方もなくうれしい日だ

息子よ
おまえが生まれた日は
五月なかば
椎の嫩葉に光が碎け それは
見ゆるかぎりの世界を
微粒子のように充たし
丘では馬が嘶いていた
なんと広い世界だろう
なんと光の多い日だろう
なんと美しい日だろう

巨大な複眼のような空から
途方もない面積をしめ
ひかりが拡散してふるなかを
妻よ おまえは息子をうんだ
この廣大無辺の面積のなかでは
小さな粒子でしかない
おまえらが
私には
なんとやさしい存在だろう

この詩を立原正秋は、詩集『光と風』、小説『冬の旅』、小説『冬のかたみに』において、計3回用いている。当時の状況を考慮すると、「息子を得た喜びにあふれた詩」としてのみ、単純にこの詩を解釈すべきではないと筆者は考える。1945年の日本の敗戦によって、朝鮮は植民地支配から解放された。しか

し「解放」と同時に、朝鮮の北部にはソ連（当時）が、南部には米国がそれぞれ駐留することにより、植民地支配に代わり、実質的な分断統治・管理が行われることになる。このような「祖国」の現状を、立原正秋が知らなかったとは想像しづらい。

1937年に11歳で渡ってきた日本は、金胤奎であった当時の立原正秋にとって、居心地のよいユートピアでは決してなかった。母語である朝鮮語よりも日本語を使うことを強いられる学校生活などにおいて、彼が味わった葛藤・労苦は、筆者の想像を超えるものだったに違いない。前述の「剣ヶ崎」における太郎と次郎の発言は、立原正秋の心情を相当に反映したものだったと推測される。そして、日本の敗戦と朝鮮の「解放」と分断。「帰国」という選択は、翌年1946年に早稲田大学文学部の聴講生となった段階で、20歳の立原正秋の頭にはすでになかっただろう。

そのような彼にとって、息子の誕生は、自らのこれからの人生における根本的な精神的支柱を得るものであったと考えられる。「言祝ぎの日」の3回にわたる使用は、その精神的支柱を再確認することに他ならなかったのではないだろうか。妻・光代の次のような証言が、それを裏付けている。「家族にへばりついてゐるみたいでした。寂しいひとでした。家族以外に心を打ち明ける相手がゐなかったんでせう」¹¹⁾。これは、在日朝鮮人二世である歌手・新井英一が、自作曲「清河（チョンハー）への道」において「家族が俺の国」と歌っていることと共通するものがある。

6. おわりに

ここまで、作家・立原正秋の、在日朝鮮人一世としての民族意識や葛藤などについて概観してきた。6つの名前を生きた彼の生涯と

作品には、朝鮮（韓国）と日本の関係を考察するにおいて、また、日本社会を考察するにおいて、重要な要素が数多くちりばめられている。

本稿で述べたように、1948年は、立原正秋にとって極めて重要な意味を持つ年である。戸籍名が「米本正秋」となったこの年の秋に彼は、民族名の金胤奎（キム ユンギュ）で、「ある父子」という小説を執筆している¹²⁾。『自由朝鮮』3巻1号（1949年）に掲載されたこの小説では、植民地支配下における民衆の惨状がリアルに描かれている。次回は、この「ある父子」を取り上げ、立原正秋の在日朝鮮人一世としての民族意識・葛藤に、さらに接近していきたい。

11) 高井：前掲書，111.

12) 朝日新聞（電子版）2008年11月1日11時8分入力記事

http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY200811010076.html

引用文献・注

- 1) 立原正秋：現代長編文学全集49 立原正秋 剣と花 鎌倉夫人，403，講談社，1969
- 2) 武田勝彦：身閑ならんと欲すれど風熄まず，KSS出版，1998
高井有一：立原正秋，新潮社，1991
- 3) 筆者は、日本で定住・永住することになった朝鮮半島（済州島なども含む）にルーツを持つ人たちを総称して「在日朝鮮人」と表記する。その中には、朝鮮籍、韓国籍、日本籍の人たちが含まれている。
- 4) 高井：前掲書，183.
- 5) 高井：前掲書，66.
- 6) 立原正秋：剣ヶ崎・白い罌粟，92，新潮社（新潮文庫），1971
- 7) 立原：前掲書（1969），403.
- 8) 立原：前掲書（1971），93－94.
- 9) 立原：同上書，141.
- 10) 立原：冬のかたみに，213－215，新潮社，1975

